

## 同人作品

### 冬の盛り 秋山義仁

沈々と雪が降り積む冬盛り盛りの雪に衣かさねて鶴が舞う  
学校は統合されてバス通り子供の姿見ればうれしい  
雪凍り石灰石より堅くなる道の端雪が積られ真ん中歩く  
雪寒く春は未だなり小正月川辺にて氷割りて音を楽しむ  
梢には山茶花未だありて夕闇の中にひっそりと咲く  
海の道暮れきって一步二歩夕日隠れて月光風になる  
まどろむは冬の間の石の室天にまかせてとぐろ巻くくちなは  
夜が明ける窓打つ風のほのか音産毛けばだてとこしえに冬

まんまるまんまる丸になる尖った槍の穂もいつかはきつと丸  
くれなずむ環状列石墓愛し子はタンポポ綿毛につつま埋葬

車窓の春 石邊綾子

慰めはいらないせめていまはただ小さな海におぼれていた  
懐かしさを超えて突然あふれだす泪のふちを漂うばかり

霞立つ丹沢山のふもとから来る人のいて今日は出張

源はどこにあるかと棹させば小魚いっぴき撥ねて啓蟄

すぐにまた会えるといったあのひとも卒業式から会えず還暦

想い出訪ねて 井上省吾

雪残る初春の村閑散と人まばらにて寂しさを見た

ある冬の長野県行き残雪の白いかたまり道路のわきに

窓越にアルプスの山雄大に白い帽子をかぶって眠る

小谷駅ホームに降りて何も無く白馬に戻り蕎麦にありつく

なつかしの歌聞きながら揺られてる寒さの増した椅子に座りて

なつかしむ若き昔の出来事をいろいろあるが今は楽しき

これまでの過ぎし日想い陽の当る窓辺に寄りて椅子に揺られる

いろいろと苦しい時もあったけど楽しさのみを心に残す

過ぎし日を想い出してはなつかしむあつと云う間のここまでの日々

あんなこと振返りみるこれまでを若い時の良き想い出に

月に居たうさぎは今どこにいる昔を忍ぶうさぎ年の日

世の中の移り変りが激しくてついていけないデジタル世界

留守電をうまく使って身を護るオレオレなどにかからぬように

なつかしく昔の歌を聞きながら窓辺に寄りてただ外を見る  
ナツメロを聞いては昔思い出し若かったあの日あの時  
国産の果物捜し買物へりんごやみかん今が食べ時

母の不在 甲村雅俊

父の手をひきて歩くと母のゐない部屋をちらちら父は確かむ  
骨折し入院したる母の不在、さみしさ重く のしかかるなり  
幼き日われの心に流れ来し 昭和歌謡のやうなさみしさ  
大腿骨を人工骨に置き換へる手術を祖母も受けたのだつた  
火葬され人工骨の残れるを サイボーグだ、と田吾作の言ひ  
如月に祖母は逝きたり わが父の驚愕のこゑ やがて悲しみ  
母逝かばどれほど深き悲しみが、われを襲ふか 母入院す

人間は自分自身と法だけをたよりに、雪の降れる涅槃会  
栲領巾のハクモクレンは満開に われににほはねしながらわ広場  
車椅子を押して歩けば、三月の光まぶしく 気圧さるるほど

真夜中の光 氷室敬子

病もつわれにつきまとう死の影はどこにもいかないただよっている  
真夜中の光かがやくそのひかりわが晩年のかがやきとする  
高層に風を入れて気をはらす簡単な事が我を生きさせる  
ほとほと困っている我なる夕べの灯りが泣くほど悲しい

霜焼けデビュー 本田洋子

大晦日ガラス戸拭けば来る年の希望の輝き見えるかしらん

雲も無く晴れ渡りたる元旦の陽は燃えにけりひとり正月

元旦のメデイアに溺れ過ぎしなば三百六十五日あつと過ぎ去る

冬至から早や陽は伸びて睦月十日沢では芹が伸び始む頃

雨の日も風の吹く日も待ちにける母の運びしご飯もろもろ

苦しくて明日を生き抜く力無しと言いつつ葉を出し笑いて居りぬ

偶然に天から降った吾が住居帰れば吾の呼吸始まる

一月の寒中暖有り敏感な台湾リスが木の枝走る

久し振り雨に心が潤いて次から次と涌く詩情うたごころ

北風がビュービュー唸る一月のまだ十日余り南天揺れて

南天の難を転ずる赤い実は鳥たちに何処へ運ばれるでしょ

ブルブル雪が降る降る北陸に日本列島寒気団の中

夕五時の日暮れは延びる陽は残る寒い寒いと縮んでる間に

一月に盆栽という小宇宙木瓜の花咲くオレンジの花

鶉のイーヨイーヨと鳴く声に返事しましよか真冬の空に

あの人とご先祖様に手を合わせ神ましますとこの人に合わせ

万智さんは常に言ってるいつも言う「言葉の国に住んでいます」と

朝五時の指の冷たさ湯を沸かしカップを握り手を温めり

重ね履き重ね着をして大寒を越えにけるかな省エネ対策

湯疲れに昼寝する癖いつの間に年老人の気持ち良さげに

手の小指薬指とが赤く腫れ今年初めて霜焼けデビュー

カラカラと寒風荒ぶ如月の枯葉転がる乾いた道に

今日からは春と呼びそな立春の桜の便り吹雪の便り

ベランダにただ一鉢の花を置く共に命を生きて欲しくて